

ナバリスト 12

松崎 瑠美 さん | 多文化共生センター (NabiChan) 職員

まつぎ・るみ ● 大阪出身。大学でジェンダーや移民、防災など多岐にわたる見識を深め、「学んだことを地域に還元したい」と祖父母が住んでいた名張に移住。現在は多文化共生センターの職員として、外国人住民のサポートや多文化共生のまちづくりに取り組んでいる。



中国出身の任さんと2人でセンターの業務を担っている



相談対応では、解決して笑顔が見られた時にとってもやりがいを感じるという



大学で防災を学んだ経験を生かして、外国人住民に防災を教える活動も

外国人との違いだけじゃなく、同じところも探してみて

大学では、外国人の学生が多く、日本語よりも英語を話すという環境で学び、働いていました。日本にいながら外国にいるような状況だったんです。多文化共生は専門ではなかったのですが、いつの間にか「多文化」に踏み込んでいたんですよ。名張へ移住後、「自分の経験を生かして人を助ける仕事はこれだ！」と感じて、多文化共生センターの職員になりました。

名張に来て驚いたのは、ボランティア精神旺盛な人がとても多いことと、地域がしっかりしていること。日本語教室のボランティア講師を養成する講座も、毎年定員を超える申し込みがあります。サポーターやイベントがきっかけで、外国人と友だちになったという人もいて、多文化共生が自然に根付き始めていると感じます。外国人住民がサポーターになってくれることもあるんですよ。私の仕事は、「人のために何かしたい」という人と地域をつなぐことだと思っています。

外国人と接する上で文化や習慣の違いを受け止め合うことはもちろん大切。そして、私はぜひ「同じところ」も探してほしいと思います。少なくとも、「名張に住んでいる」という同じところが1つありますよね。違いばかり見るんじゃなくて同じところも意識すれば、もっと仲良くなれると思うんです。「外国人」「日本人」じゃなくて、色々な個性がある「名張市民」が活躍するまちになれば、名張はもっとおもしろくなっていくはず！

編集後記

今月は、特集のほか外国人にまつわる2つの記事を掲載。海外から注目されると、改めて名張の潜在力を感じます。伊賀酒を楽しみながら山里の美味に舌鼓を打てば、その感慨もひとしおです(たか)

名張の取組を「自国へ持ち帰り生かしたい」と視察に来たASEANの学生の声。地域の皆さんが明るく学生を出迎えてくれ、言葉が分からなくても互いに笑い合う顔が印象的でした(くま)

日本語教室の取材時、生徒の一人が作ってくれた料理を頂きました。「おいしい！」と伝えると、笑顔で作り方を教えてくれたんです。些細な一言から交流が始まるんだと実感しました(はる)

ごみ分別アプリ「さんあゝる」が3月末で終了に。市公式LINEではごみの通知のほか、市のイベント情報など希望に沿った配信をお届けします！ぜひ登録してくださいね(こ)



名張のひと・活動

